

世代超えて心をつなぐ

た。故郷の今を、皆に伝えたいと思って」。地区出身の鈴木洋子さん(三三)＝仙台市宮城野区Ⅱが手段に選んだのが新聞だった。

「新聞くささい」
宮崎県高千穂町の民家の玄関先。隣に住む高千穂小学校六年の浅岡心咲さん(二二)と四年の光翔君(〇〇)の姉弟が下校後、元気な声を響かせた。妻と暮らす甲斐幸市さん(七七)が読み終わった宮崎日日新聞を二人に手渡す。

「はい、どうぞ」「ありがと」
小学生が高齢者宅を訪ねて古新聞をもらう。全国的にも珍しい取り組みが始まったのは昨年四月。きっかけは、心咲さんの担任だった田崎香織教諭(四六)だ。

田崎教諭は、好きな記事をノートに貼り、要約や感想をまとめる週一回の宿題

④ 地域社会



甲斐幸市さん(右)から古新聞を受け取る浅岡心咲さん(中)と光翔君のきょうだい＝宮崎県高千穂町で

「新聞スクラップ」を約五年前に始めた。祖父母らに古新聞をもらう児童を除き、今は四、六

「新聞スクラップ」を約五年前に始めた。祖父母らに古新聞をもらう児童を除き、今は四、六

「地域のつながりがあるように見えて、ないのが現状。新聞を通して関わられたら」。町では人口に占める六十五歳以上の割合が四割。一人暮らしも多く、児童の家は核家族化が進んでいる。

二〇一二年三月、竹浦の呼び名をとってA4判の「たげな新聞」を創刊した。載せるのは神事や祭り、海の様子、高台移転…。郵送や手渡しで年四回、離れて暮らす集落の住民に届けた。「届いたよ」って、電話をくれるおばあちゃんもいた」
震災から六年。地区に高台移転地が完成し、三十二世帯が戻った。鈴木さんはたげな新聞がその役割を終えようとしていると感じている。地元区長の鈴木成夫さん(六八)は言う。「たげな新聞が地域の心をつないでくれた」

◆NIE=Newspaper In Education (教育に新聞を)